2021年8月1日（日）主日朝礼拝説教

『死は勝利に飲み込まれた』　井上隆晶牧師
Ⅰコリント15章35～43、50～59節

❶【キリストは選んだ人に現れる】
「**死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。**」（35節）死んだ人間がどのように復活するのか、どのような体をしているのか、これが一番興味のある、私たちが聞きたい話なのではないでしょうか。ところが聖書を読むと詳しくは書いていないのです。イエス様が復活した瞬間を見た者は誰もいません。弟子たちは空っぽの墓を見、その後姿を現したイエス様を見たのです。ある時は別人のような姿で現れ、イエス様だと分かったとたんに見えなくなり、そうかと思うと共に食事をし、語り合い、触れることもできたというのです。まことに不思議としかいいようがないのです。こんな言葉が残っています。「**私の手や足を見なさい。まさしく私だ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたが見えるとおり、私にはそれがある。**」（ルカ24：39）といって手足を見せ、焼いた魚を目の前で食べたというのです。
旧約時代、神は姿を隠され、ごく僅かの人たちに天使の姿で現れたり、声をもって語りかけたり、夢の中で語られたりしたことが書かれています。復活も同じなのです。聖書を読むと、イエス様は誰にでも「**復活した姿**」を現しませんでした。姿を見せる人を選んでいるのが分かります。それはイエス様を信じる人たちに現れるということです。人は奇跡を見たら信じるといいますが本当でしょうか？旧約時代、強大な武力を持つエジプト軍が紅海の海に沈み、イスラエルは勝ちました。その奇跡を体験してもイスラエルの人たちはすぐに神を疑い始めました。新約時代、イエス様は病人を癒し、悪霊を追い出し、食べ物を与え、多くの奇跡を行いましたが、人々がイエス様を信じていたのは少しの間だけであって、すぐに信じなくなりました。人は奇跡では信じません。信じる人は一言で信じます。信じない人は何を語っても、何を見ても信じません。ゆえに神は信じようとしない者には現れず、語りかけることもしません。

❷【死は新しい体をもらうための種蒔きにすぎない】
「**愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。**」（36節）ここでパウロは、直接にその疑問に答えることはせず自然界で日々行われている神の神秘の力について語ります。この世は神によって創造されたので、自然界のすべての出来事は神の存在を私たちに伝えるメッセージなのです。神は万物の上におられ、万物の内におられ、万物を超えておられます。自然科学を神と切り離して考えたのが人間の間違いです。信仰の目をも

って見れば、どこにでも神を観ることができます。ここではまず「**穀物の種**」を例にとって語ります。あなたが畑に蒔いた穀物の種は、土の中で殻が割れて別の姿に変わるではないかというのです。殻が割れることをここで死と呼んでいるのです。次に「**神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。**」（38～39 節）神は御心に従ってすべての種にそれぞれ違う体を与えます。麦、米、蕎麦も、皆違った形の茎、葉、花という体をもっています。また神はそれぞれの動物に違った肉を与えておられます。更に天体を例にとって地上の体と天上の体があると語ります。「**また天上の体と地上の体があります。しかし天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあって、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。**」（40～41 節）神は天の惑星や星々にそれぞれ違う輝きを与えておられます。それと同じようにすべての人が復活しても、来世でいただく天上の体の輝きには個人差があるということを言っているのです。これらの話から死は種蒔きであって、次の世界で生きるための新しい栄光の体をもらうための準備に他ならないということが分かります。

●「われらの前途には来世の祝福があるからには、務めて己を義人の列に立てるようにし、死んだ者のために泣くことをせず、一生を悪の中に終える者のために泣こうではないか。農夫は麦の殻が破れるのを見ても泣かず、反って麦が地中に落ちて依然として固いのを見たら悲しみ、その破れるのを見たら喜ぶ。…怪しんではならない。使徒は埋葬のことを種蒔きと呼んでいる。埋葬は最も良い種蒔きである。地上での種蒔きの後には、死、労苦、危険、心労が続いてやってくるが、埋葬という種蒔きの後では、正しく生活していれば栄冠、褒美がもらえるのだから。」（４世紀のクリュソストモスの説教から）

❸【来世では輝かしい体をもらえる】

「**死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときには朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときには卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。**」（42～43 節）来世でもらう体はこの世の体とは比べものにならないほどすばらしいものとなるでしょう。これも自然が証しています。

●先日、2018 年に永眠された大川圭子さんのお連れ合いさんと共に食事をした時、彼がボランティアで昆虫について教えられるという話を聞きました。「先生、蝉の一生って知っていますか？」と聞かれました。蝉は木の幹に卵を産みます。その卵が翌年の梅雨ころに孵化（ふか）します。孵化したばかりの蝉の幼虫は真っ白です。孵化した幼虫はすぐに土の中へ潜っていき 3～17 年土の中で過ごし、そこから地上に出てきて羽化（うか）して成虫になります。成虫になってからは約 1 週間から一か月生きると言われます。しかし成虫の姿は幼虫とは違い、強く

大空を飛び大きな声で鳴きます。昆虫は幼虫からさなぎになり成虫になりますが、それが復活のひな形になっているのです。

目、鼻、耳、口など、私たち人間や動物、鳥、魚たちの感覚器官は、それぞれこの世で生活するためにあった形をしており、この世の恵みを受け取る構造になっています。それならば来世では神の恵みを受け取るように、感覚器官や体の構造も変化することでしょう。この世での私たちの目はある一定の物しか見れません。太陽のようなあまりにも大きな光を目に入れることはできませんし、鷹のように遠くにいる者も見ることもできません。しかし来世ではまばゆい光の中におられる神を見る者となるでしょう。耳もこの世では犬や蝙蝠のように沢山の音を拾うことはできません。しかし来世では神の声を聞こえるようになるでしょう。天のもの、神のものが入るには、この地上の体はあまりにも限界があるのです。「**朽ちるものは朽ちないものを受け継げない**」（同 15：50）のです。だから朽ちない天の宝物を受け継ぐ体に変えられるのです。こうして卑しいものは輝かしいものへ、弱いものは強いものへと変容するのです。このように人は死で終わるのではありません。これから永遠に続くもっとすばらしい世界が始まるのです。

●クリユソストモスはこう書いています。「この世でも体は聖霊に属することが出来るが、来世の体はなお一層、聖霊に属するようになるだろう。聖霊がおられなければ魂は空しいものになるが、この世では、人は重い罪を犯すので聖霊の大いなる恵みはしばしば飛び去ってしまう。また聖霊が魂の中にいても、肉の命は去ってしまう。しかし肉体が復活するときは、この世と反対で、聖霊は常に義人の身体の中にあり、体の主人となって、聖霊を宿した魂と同じ状態になるのである。」

❹【死は何の力もないことを知れ】

パウロは51節で「**わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。**」と宣言します。神秘はミステリオンといって「神が隠しておられる秘密の計画」です。最後のラッパ（合図）が鳴ると死者は復活して朽ちない者とされ、私たちは変えられます。この矛盾した狂った世はいつまでも続きません。最後があるのです。そこから万物の回復が始まります。

「**この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。…そのとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。『死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。』**」（53～55 節）パウロは「着る」という表現をすることによって、人は死んでも消滅しないことを教えようとしているのです。肉体は一時土に帰って見えなくなりますが、その人の存在、魂は残っています。その魂が朽ちない体、死なない体、永遠の体を着るのです。その時、人間の救いが完成し、この世からいっさいの死は消滅します。

『死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前の

とげはどこにあるのか。』これは旧約聖書のホセア書13章からの引用ですが、「**勝利**」とはキリストの死への勝利、復活の事です。死はキリストに飲み込まれました。毒を飲み込んでも、その体内で解毒され何ともなければ、毒はその効力を失ったことになります。それと同じようにキリストは死を飲み込んでご自分の中で解毒し、死を無力にしたのです。キリストは人類を支配している敵である死（悪、罪と同義語）と闘うにあたり、死なないで勝つという方法ではなく、自らが一度死んで、まるで死に飲み込まれたかのように思わせて、その死の中に入って行って、死を内側から破壊する（滅ぼす）という方法を取られました。それが三日目の復活です。パウロは死が無力になったことを「**死よ、お前のとげはどこにあるのか**」と語ります。バラには棘がありますから私たちが安易に触れると傷つきます。しかしその棘が取り去られたら傷つくことはありません。同じようにキリストの死と復活が、死の棘を取り除いたのです。棘が抜かれた死は、私たちを二度と傷つけることはできないのです。ここを読むとコルベ神父を思い出します。

●第二次世界大戦の時、アウシュビッツ収容所でポーランド人のコルベ神父が、ある一人の収容者の身代わりになって亡くなりました。彼は自分を殺そうとする兵士をも赦して亡くなりました。そのことを伝え聞いた多くの収容者たちに変化が起こりました。一日の重労働を終えた点呼の時に、真っ赤に沈んでゆく夕日を見て彼らは「ああ、なんてこの世界は美しいんだ…」と言ったというのです。それはどんな過酷な状況の中でも、人は人らしく生きることが出来るということをコルベ神父の死で知ったからです。収容者たちは人間の尊厳を取り戻しました。まさに死と悪の敗北です。

勝利はキリストによって私たちにもたらされました。この「**主に結ばれているなら**」（15：58）私たちのこの世での苦労は無駄にならないのです。死はいぜんとしてありますが、それは私たちをどうすることもできません。だからもう死を恐れなくてもいいのです。本当に恐れなければならないのは、罪の中にとどまることです。苦難があっても復活が待っています。それを希望とし、キリストにつながり、キリストが生きたように生きて行きましょう。